資料1

東日本大震災･原子力災害アーカイブ拠点施設

基 本 構 想（案）

【概要版】

平成29年3月

福 島 県

1 アーカイブ拠点施設の基本的な考え方

1. 基本理念

世界初の甚大な複合災害の記録や教訓とそこから着実に復興する過程を収集・保存・研究し、風化させず後世に継承・発信し世界と共有することは、被災を経験した人々の共通の想いです。アーカイブ拠点施設では、特に福島だけが経験した原子力災害をしっかり伝えることとし、以下の3つの基本理念を掲げます。

【基本理念】

原子力災害と復興の記録や教訓の **未来への継承・世界との共有**	福島にしかない原子力災害の経験や教訓を生かす **防災・減災**	福島に心を寄せる人々や団体と連携し、地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等による、**復興の加速化への寄与**

2. アーカイブ拠点施設で伝えること（メッセージ）

基本理念を実現するためには、アーカイブ拠点施設から発信するメッセージが必要となります。アーカイブ拠点施設では、未来に向けて、国内外に向けて、2つのメッセージを発信していきます。

1.　福島の経験を踏まえた「危機意識」の喚起

福島の複合災害から、
想像を超える災害が起こりうることを知る。
この経験を忘れずに、
“備える”ことによって、安全・安心な社会を実現していこう。

2.　「新しいふくしま」の創造に向けて、
世界から寄せられた英知を生かし、果敢に挑戦することの大切さ

原子力災害からの復興に向けて福島に寄せられる世界の英知。
福島は、それらに感謝を伝え、果敢に挑戦し続けることで、
新たな価値を創造していく。
そんな福島とともに、希望に満ちた未来を切り拓いていこう。

3. アーカイブ拠点施設の果たす役割

基本理念を実現するために、アーカイブ拠点施設の果たすべき役割として、「みらい」へのゲートウェイとなることを掲げ、ゲートウェイとして5つの出会いを創出します。

～「みらい」へのゲートウェイ～

ここで創り出す5つの出会い

1．「経験」・「教訓」との出会い

複合災害、特に原子力災害に関する福島の「経験」と、そこから得た「教訓」に出会う玄関口として、原発事故前の日常や失われたもの、事故直後からのこと、そして現在進行形の経験と、それらを通して得た「教訓」を蓄積・公開していきます。

2．福島の経験を生かした資料や研究との出会い

複合災害の経験を伝えるための資料、実物の受け入れ窓口となるとともに、その資料を末永く保存していきます。また、資料単体からでは見えにくい、福島の経験や教訓を分かりやすく伝えるための、調査・研究にも出会える場とします。

3．様々な活動、人との出会い

様々な人、団体をつなぎ、新たな活動などに生かす交流の玄関口として、経験や教訓を残し伝える方や、復興や福島イノベーション・コースト構想での新たな取組を実践する個人・企業・団体との出会いを創る場とします。

4．「いま」と「これから」との出会い

福島のリアルな現状と、復興を進めるこれからの福島の展望に出会う玄関口として、最新情報、資料などを常に収集・発信します。さらに、最先端技術の実物や実演・プレゼンテーションにも出会える場とします。

5．回遊の出発点としての「現地・現場」との出会い

帰還を進める１２市町村、新たな産業の集積を進める福島イノベーション・コースト構想の各拠点、そして復興を遂げる福島県下全域の「現場・現地」へと誘うゲートウェイとなります。アーカイブ拠点施設で出会った内容をより深く確認・実感できるツアーなど、現場・現地に実際に行く機会にも出会える場とします。

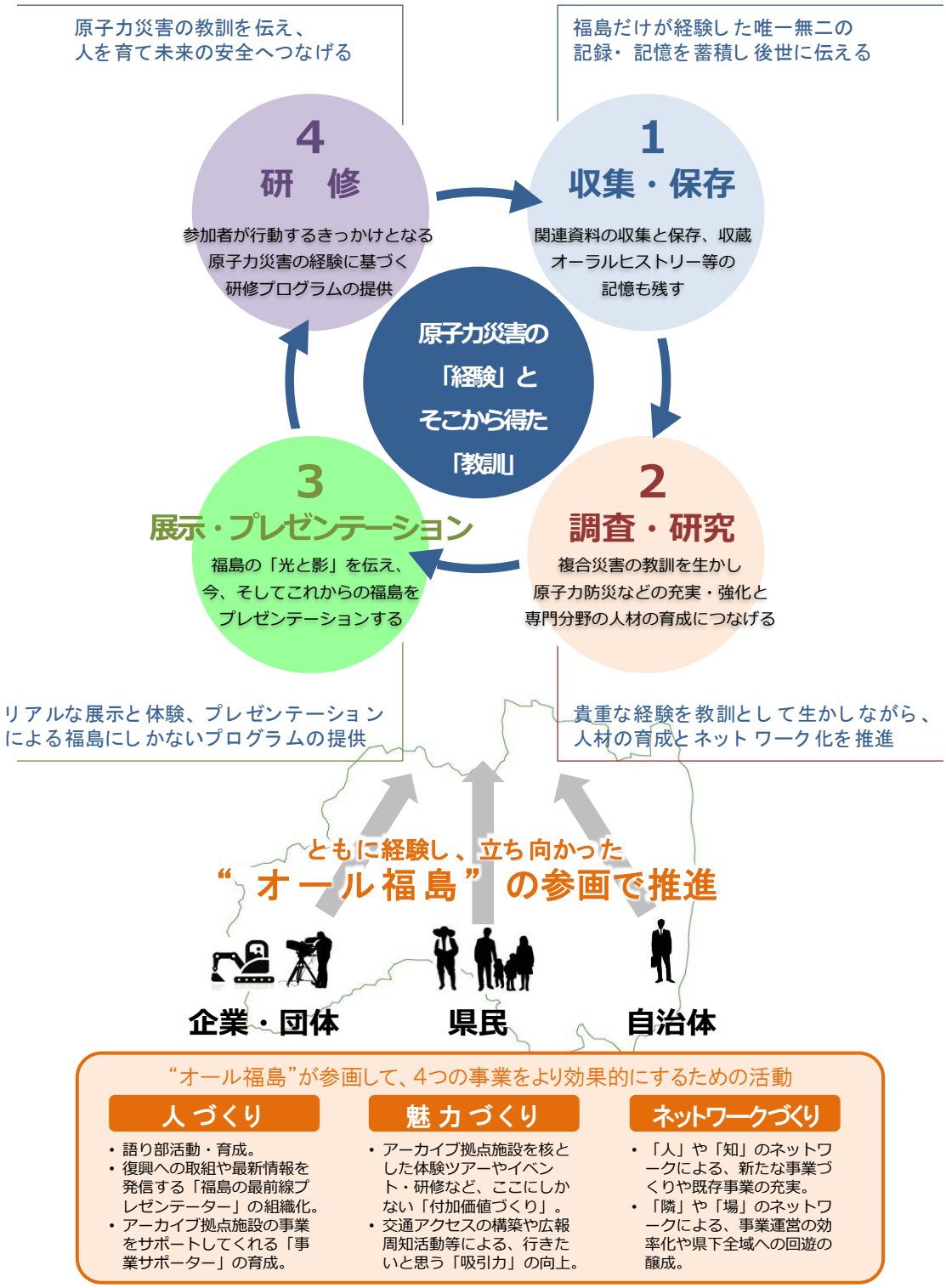
2020

東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて、
国内外に向けて福島への“出会い“を用意して
復興の加速化へとつなげる

2 施設概要

1. 事業・活動の方針

「みらい」へのゲートウェイとして、様々な出会いを創出するために、4つの「事業」と3つの「活動」を、“オール福島”の参画で推進していきます。



2. 建物概要

建設予定地

双葉郡双葉町大字中野地内

敷地面積

約35，000㎡

施設規模（延床面積）

約5，200㎡

総事業費

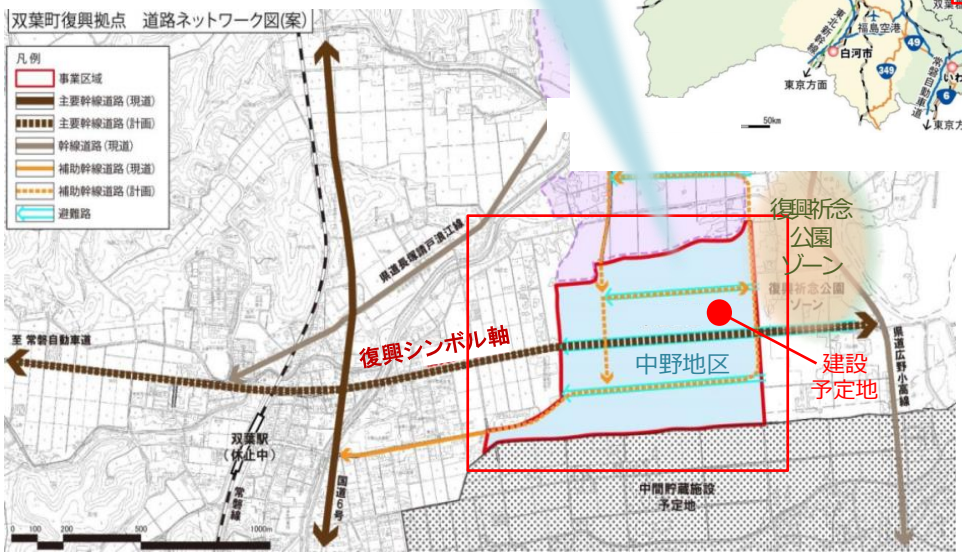
約55億円程度

■延床面積の内訳イメージ

展示・プレゼンテーション	1,750 ㎡ 程度
収集・保存	980 ㎡ 程度
共用等	2,470 ㎡ 程度

福島県

建設予定地



周辺環境：
常磐自動車道浪江ICから約12km、双葉IC（仮称・平成31年完成予定）から約7km、JR常磐線双葉駅（休止中）から約2km

アーカイブ拠点施設は、双葉町の中野地区という、地震、津波、それに続く原子力災害を実感できる場所に建設を予定しています。この地で、福島だけの経験や教訓、復興への取組、新たな挑戦を発信することで、今後も風化させることなく、着実に未来に残し継承することにつなげていきます。

3 展示について

【基本的な考え方】

アーカイブ拠点施設の展示では、その資料（財産）を“教訓”として伝え、今なお続いている福島の復興の姿を記録しながら公開するという役割を果たし、未来へ向けたメッセージを発信していきます。

「人」が経験し、「人」が助け合いながら立ち向かってきた災害。その記録と記憶の展示に当たっては、「人」が「人」に伝えていくことも大切にします。

■展示ストーリーとイメージ

事故前後の「事実」、ふくしまの「経験」を“教訓”として発信し、

ストーリー

1 プロローグ
全体ガイダンス

▶

2 災害のはじまり
原子力発電所事故
安全神話の崩壊

▶

3 原子力災害の影響と対応（初期）
放射線からの避難
事故への国内外からの注目

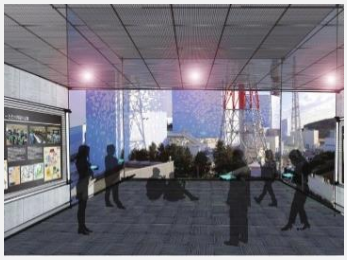
1
- 何度も移動した避難
- 一変した日常
- 県民の証言

何度も移動した避難

避難の変遷

ふるさとの日常

2
- 災害の始まり
- 原子力発電所事故



原子力発電所事故について

事故当時の対応の記録

3
- 避難の困難や苦悩、人々の証言
- 国内外からの注目、支援

経験を語る

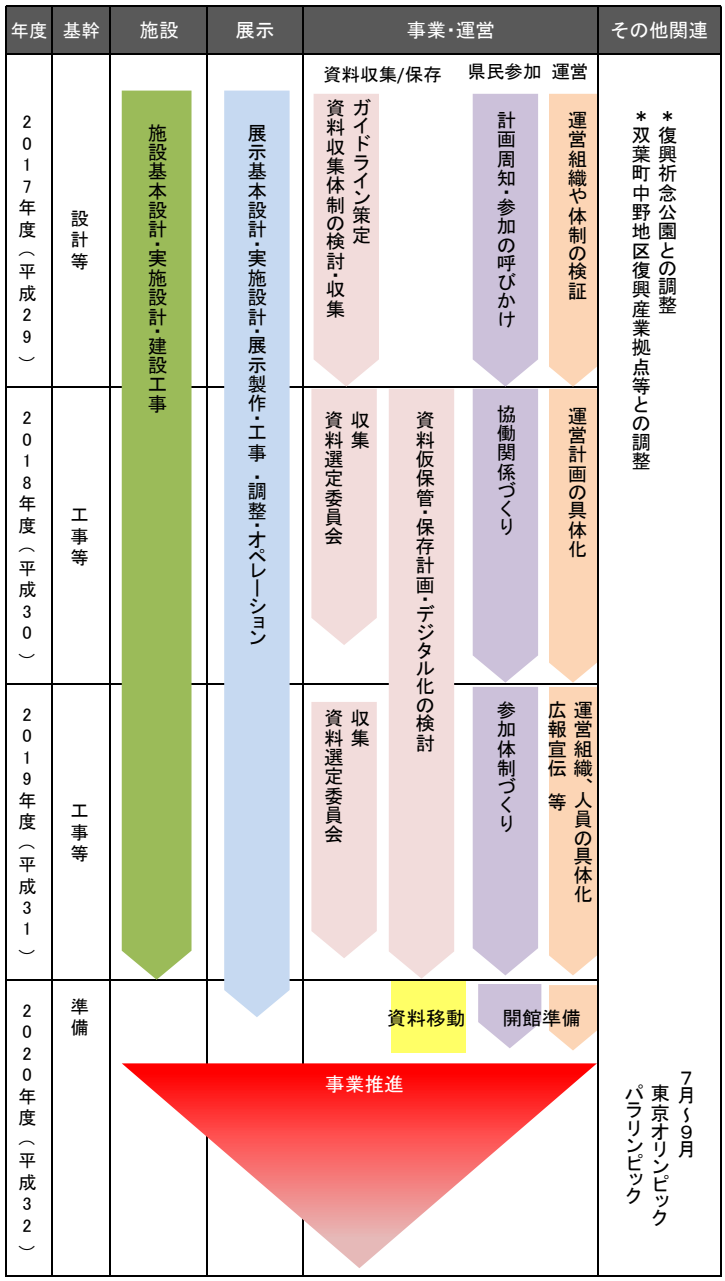
支援の記録

ここでの体験によって、この災害を「自分事」として捉え、日常生活を振り返ったときに、豊かさや幸せとは何か、今、そしてこれからの自分がすべきことはどんなことなのか、といった自分の価値観を振り返るような想いを抱いてもらうことを目指していきます。

4 実現に向けて

【今後のスケジュール】

アーカイブ拠点施設の開館は、2020年7月の東京オリンピック・パラリンピックを視野に入れ、周辺の復興祈念公園や双葉町中野地区復興産業拠点等との調整を行いながら、整備を進めます。



表紙のイラスト　「起き上がり小法師」

起き上がり小法師は、福島県（会津地方）の民芸品で、何度倒しても起き上がることから、「七転八起」の縁起物として知られ、今、まさに復興へ向けて起き上がろうとしている福島のシンボルとして注目されています。アーカイブ拠点施設で伝えることのひとつに、挑戦するスピリッツ、失敗しても何度も起き上がる、ということがあります。この想いを国内外に、後世に伝えることを目標に、そのイメージとしてビジュアル化しました。